

しきものなから、このころおしなべたるならはし
ならぬはいかなる故やらん。さてまたたつる日
は、今こそさまくなれ、のぼりての世にいと首
かたむくれば、顯季ぬしの歌に、門松をいとなみ
たつるそのほどに 春あけかたによやなりぬらん
さりけりく、今宵ぞやとつぶやく耳に、け近く
八聲の鳥なきて、年はあけがたになりけり。あ
はれやかみんく、さるにても此かたまつ、初日
の影まちて、とさはの色に匂はんや 匂はじやあ
づつかなうこそ。

故郷と都

(故郷に母と女の友あり
都にわれと男の朋あり)

鷺

水

故郷

年の始にうちよりて

へだてぬ君と今こゝに

語るも聞くも武藏野の

都

其の一もとの外ぞなき

其の一もとの外ぞなき
其儘なるは都より

故郷

こそ玉ひし言の葉の
わが故里を思ふなり

雁の玉章と絶えしと
八重の汐路を距つとも

都

恨むはあろか母子中
距てぬ心は君ぞ知る

距てぬ心は君ぞ知る
空行く月の隅田川

故郷

よしや海山遠くとも
上野の花を音つれん

別れし今日の身と知ら
葦つみし夢なれや

都

樂しき野邊に打ひれて
歌留多取りし夢なれや

歌留多取りし夢なれや

今は旅旅のうき思ひ

せめては雁の玉章を

故郷

夢のうき橋渡る身と
過し月日や來ん年の

都

又の逢瀬ぞいそがる、
いかで忘れん來し方の

故郷

昔戀しき餘には
いつの世誰か定めけん

都

其かみ人ぞ恨めしき
嬉しきたねと諦めて

故郷

さは去ながら久方の

又逢ふまでの片身とて

思ひなしても戀しきは

またの逢瀬ぞ急がる、

心は同じ西東

六年あまりの古事を

逢ふを別れの始めぞと

其かみ人ぞうらめしき

恨みはやがて逢ふ折の

此年月を過さなむ

月もみ空にゆきめぐり

闇の夜のみは非れば

都

人もさこそと頼むなれ
君にしあれば幾年も

故郷

距てぬ友と今宵しも
語るもうれし東路の

都

君は何處に今いかに
白川の水凍る夜も

故郷

歌留多に更る夜と共に
遠き旅寐の小夜衣

都

幾度君やしぼるらん

人もさこそと頼むなれ

頼まれぬ世に頼むべき

めで玉ひてしためとして

積る思の數々を

君はいづこに今いかに

阿蘇が峰ぞし吹く朝も

ささくてまよと思ふなり

去年のむつきを忍びつゝ

幾度君やしぼるらん

我子の旅路に出でし上

雁の行衛に打見ても

吾古里のなれ衣

故郷

旅路ならねど旅衣

結ぶは今宵初草の

うら珍らしき夜の様を

見せんよすがのなきぞうき

都

見せんよすがのなきぞうき

同じ衾に二人して

懐しき文の御返しに

筆とりかはすはらからを

故郷

君が手馴の文机に

ありし面影恐ひつゝ

一夜を千代と語りあかさん

一夜を千代と語りあかさん

都

一夜を千代と語りあかさん

一夜を千代と語りあかさん

御返し文かさはてゝ

恐ぶにあまる母の身を

新年梅

不盡廼舍

霞まがへる

御空も匂ふ

霜をあざむく

それよこの花

お正月

事の始めの

いざ羽子つかん

いざたこあげん

軒端の梅は

霜に堪へたる

清くをしく

心にかざし

天つさざりの

初日のかげに

たい一輪の

春べし知らぬ

お正月

いもとよ友よ

おとよ友よ

ささがけぬ

その花の

け高さ装ひ

身につちまとい